

## 【大会校企画シンポジウム】

比較的視点からのソーシャルワークの挑戦：  
 ハワイの脱植民地化ソーシャルワーク実践アプローチ  
 —SDGs 基盤と先住民族課題への日本のソーシャルワークの期待と展望—

ハワイパシフィック大学 岡田ヴィンス

キーワード：脱植民地化ソーシャルワーク アフプアア 調和

**ハワイにおける脱植民地化思考の普及** 近年、ハワイの教育の場、ビジネス、コミュニティの間で、「脱植民地化思考」という概念が広まり、地域に根ざした知識、習慣、価値観に基づく考え方が浸透している。ハワイの先住民であるハワイアン<sup>1</sup>の伝統的な土地区分である「アフプア・ア (Ahupua‘a)」のコンセプトが再評価されている。かつては飛行機や船での交通が未発達で、近くの大陸からかなり距離のある隔離された島々からなるハワイでは、持続可能な資源の管理が生き延びるために不可欠だった。「アフプア・ア」内の人々は、自身の強み(ギフト)を最大限に活用し(Burgess)、土地区分内の資源を効果的に利用し、保護に責務「クレアナ(Kuleana)」を果たしていた。隣人への尊重である「アロハ(Aloha)」や調和「ポノ(Pono)」が重要視され、社会秩序を維持するための価値観である「ワイワイまたはヴァイヴァイ(Waiwai)」や法律である「カプ(Kapu)」が形成された。しかし、ハワイが西洋に発見されてから、資本主義や個人主義の影響が増大し、ハワイ独自の生活様式が変容した。また、現代化とグローバル化の進展に伴い、社会問題が増加し、人種差別や不平等が組織的・社会的に顕在化した。世界中でSDGs(持続可能な開発目標)というコンセプトが普及している中で、単にそのキーワードを挙げるだけでなく、自己認識、隣人との共生、自然環境の尊重、生活様式や価値観の調和を実践することが強調され、SDGsのもつ本質的なコンセプト内容や目的に対して理解と実行が重要視されている。

**ハワイの脱植民地化ソーシャルワーク実践** ソーシャルワーク教育および実践の分野において、「脱植民地化ソーシャルワーク」の概念のもと、ハワイ固有の文化や習慣、特性を尊重し、アメリカ本土で育まれたソーシャルワークの理論やモデルを地域に合わせて再評価し、適応させる取り組みが広がっている。このプロセスにおいて、ソーシャルワーク教育では、自己内省の重要性、異なる背景を持つ人々への共感力の向上、スピリチュアルな側面や自然環境、人々やコミュニティとの調和「ローカヒ(Lōkahi)」、伝統的な儀式や習慣の尊重、そして文化的に謙虚な姿勢を保ちながら(Martin, Paglinawan, & Paglinawan)、コミュニケーションスキルを磨き、ソーシャルワークの専門性を高める重要性が強調される。それに応じたカリキュラムの進化が見られ、同時に多くの社会問題解決に向けたソーシャルワーク実践が継続されている。

「SDGsにおける人権問題への対応の検証と社会福祉学の挑戦」というテーマで、ハワイの事例を議論する際には、SDGs自体のキーワードよりも、全米ソーシャルワーカー協会(NASW)が提唱する専門価値やソーシャルワーク教育評議会(CSWE)が示す9つの

専門性コンピテンシー（行動特性）が、学生が学業中に習得すべき知識、価値観、スキルとして、また実践者であるソーシャルワーカーが常に活用すべきものとして強調される。

先日、マウイ島で発生した大規模な火災の際には、多くのソーシャルワーカーと学生たちが、事前のトレーニングでしっかりと手順を習得した通りに、迅速なアクションを起こした。SDGsの多くのゴールが行動の根拠としても該当するが、彼ら彼女らは学生期間や生涯教育において身につけたNASWやCSWEの価値観やコンピテンシーを土台にして、個々のニーズに応じたマイクロ視点のサポートから始まり、長期的なマクロ視点のサポートや継続的なアクションまで、幅広い活動を展開している。火災の被害は多くのハワイアンにも及んだが、食料、住居、トラウマや精神的なサポートなど、さまざまなニーズに対応するだけでなく、歴史的な植民地化や同化の影響にも目を向け、組織的な差別や不平等、それらの根底にある構造的な問題に対応し、ハワイアンの訴えに寄り添うためのサポートと努力を惜しまないソーシャルワーカーが多数存在する。

**日本のソーシャルワークのアイヌ・先住民族課題対応への期待** 日本のソーシャルワークは、日本の先住民であるアイヌコミュニティにある課題に、組織的かつ専門的にどのように対応しているだろうか。ソーシャルワーク教育において、アイヌの歴史や現状をどのように学び、それをソーシャルワークの専門的な活動の中で取り扱っているだろうか（Okada）。また、「脱植民地化ソーシャルワーク」という概念が、日本の現場に適切かどうかはさらなる検討が必要だが、日本国内での地域に根差した知識、習慣、価値観、およびそれに基づく考え方に焦点を当て、これらを日本のソーシャルワーク実践に結びつける方法についても検証が求められる。ハワイのソーシャルワークでは、クライアントやコミュニティとの活動時に、自身をゲストとして位置づけ、謙虚さ「ハアハア（ha'aha'a）」を持ち続け、声やニーズを、共感をもって聴き、持続可能な関係を築く重要性が強調されている。このようなアプローチを通じて、クライアントやコミュニティからの声やニーズに対応し、彼らが持つギフトに触れながら、日本固有の、地域に根付いた適材適所なソーシャルワーク実践が生まれる可能性があり、「人権問題への対応」という点のみならず日本のソーシャルワークのさらなる発展へとつながるのではないだろうか。

文献：

- 1) Burgess, P. (2013). Building the beloved community: A life practice. Kamehameha Schools.
- 2) Martin, T.K., Paglinawan, L., & Paglinawan, R. (2014). Pathways to healing the Native Hawaiian spirit through culturally competent practice. In Vakalahi, H.F.O. & Godinet, M.T. (Eds.), Transnational Pacific Islander Americans and social work: Dancing to the beat of a different drum (pp. 55-90). NASW Press.
- 3) Okada, V.M. (2012). The plight of Ainu, indigenous people of Japan. Journal of Indigenous Social Development Vol. 1 Issue 1. (pp. 1-14).